

バランスの遷移による聞き手主導の発話意図解釈

黒澤 義明

広島市立大学 情報科学部

kuro@nlp.its.hiroshima-cu.ac.jp

1. はじめに

発話解釈は多義的であり、単独の発話は文字通りにもアイロニーにも、あるいは間接的な依頼としても解釈可能である。聞き手は複数の解釈から、話し手の意図として正しいと考えられる解釈を選択する必要がある。しかし、発話場面では、意図決定は困難であり、聞き手は何らかの推測に頼ることになる。

本研究は上記の推測を行うために、聞き手の認識と、そのバランスに着目する。そして、この聞き手主導の立場から、発話意図解釈を行う。

2. 本研究で対象とする発話

次の場面を想定する。ある人 S が友人 H の部屋に行った。部屋がちらかっている。

1. 汚い部屋だね。

S(話し手:以下同様)の発話(1.)は陳述の発話行為を遂行する。同時に、非難¹⁾、あるいは掃除をしろ(命令)等の間接的発話行為も成立させうる。

2. きれいな部屋だね。

また、S は例文2.の使用によっても、間接的行為を成立させうる。ただし、H(聞き手:以下同様)は当該発話が発話状況と異なっていること(発話が偽であること)を認識する必要がある。

上記に述べたように、O(対象:以下同様)の評価を伴う陳述の発話行為は、表層的な評価が正・負、真・偽の場合にも、間接的解釈が可能となる言語表現である。本研究は、この言語表現を対象とする。

3. 意図決定の困難さと H の認識の重要性

H は O の評価を伴う発話に対し真偽判断を行う。しかし、例文2.に挙げた偽判断には困難が伴う。

橋元(1989)は、発話視点の移動仮説(仮人称発話)を提案した。つまり S は、「きれいだ」と評価しうる立場の人間 X を作り、視点を X に移動する。確かに、発話の観点からは正しいと言える。しかし、H が X を如何に知るかに関しては、「...「反語信号」が視点の「仮説」性を告知する装置として機能する(p.89)」と述べているにすぎない。この主張によれば、「反語信号」がなければ、H は X に移動出来ない(cf. 内海, 1997)。発話理解の説明としては問題が残る。

また、瀬戸(1997)は、意味反転メカニズム「 \ll 高めて落とす \gg という一般的な機構(p.134他)」を提示し、「...実状から著しくかけ離れたこの不安定な意味の高まりを合図に、一気にマイナスの極へ反転する(p.134)」と述べている。確かに Grice(1975)も質の公理違反の理解には、状況の明白さが必要だと述べている²⁾。つまり、「実状」が明白だからアイロニーの発話を行ったと考えられる。しかし「実状」は発話場面では明示されないため、S が明白と考えても、H には明白でないことがある(例文2.への反応)。

3. そんなことないよ。

4. 少し片付けたからね。

上記の例は、「高めても落ちない」可能性を示しており、「実状」判断に困難が伴うことを示唆する。

同様の難しさは、H が間接的な解釈を行う際にも伴う。間接的な解釈は「各種の発話媒介行為がその

¹⁾ 発話行為論では、非難は態度表明型に分類され、陳述表示型とは区別される(山梨, 1986)。また、遂行動詞の分類においても、それぞれ別範疇(Wierzbicka, 1987; Ballmer & Brennenstuhl, 1981)である。このため、非難も間接的な解釈として扱う。

²⁾ A の発話(X is a fine friend.)がアイロニーと理解されるには、X が A の秘密を漏らし、その事実を A と聞き手の双方が知っていることが明白でなければならない。ここでは、この説明を状況と表現した。

結果として付随的に成立し得る(山梨, 1986: p.31)」にすぎないため、成立は不可欠ではない。S が意図したとしても、H がそれを理解した上で、間接的な解釈を行うことは困難である。例えば、例文1.に対して、次の反応が得られることがある。

5. そうだね。

6. 男の部屋なんて、汚いものだよ。

この例は、「最終的に、...発話文脈に依存する(同: pp.31-32)」以前に、間接的な解釈を生成しようと考えなかったことを意味しており、トリガーとしての「文脈」把握の困難さを示していると考えられる。

このように、発話理解には困難が伴う。しかし、この困難さは H にとっての「実状」や「文脈」を無視しために起こることにすぎない。つまり失敗の原因は、明白でない状況を明白と考えた S の側にあると考えられる。H は自分の認識をもとに適切な解釈を行っている。したがって、H の認識をもとにした聞き手主導の立場に立った考察が必要であると考えられる。

4. バランス理論

前章では H の解釈の困難さと重要性について述べた。次に、H の認識の観点から、Heider(1958)のバランス理論を概観する(図 1 に例を挙げる³⁾)。

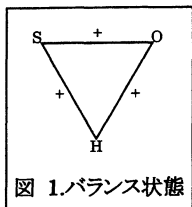


図 1. バランス状態

図中、 \overline{HO} は「H が O のことをどう思うか」、 \overline{HS} は「H が S のことをどう思うか」、また、 \overline{SO} は「S が O のことをどう思うか」に対する H の認識を示しており、正負で評価する。

そして、この 3 評価を掛け合わせ、バランス状態にある方(積が正)が望ましく、インバランス状態であれば(負)、バランス状態になるように遷移を行う。この動的遷移がバランス理論の中核をなす。

³⁾ バランス理論は発話のための理論ではなく、対人関係の知覚モデルであり、態度変容の説明を行う理論である。なお、記号は改変して掲載した。

この理論の重要な点は、 \overline{SO} が「S が持つ O についての信念ではなく、あくまで、H が持つ認識」であり、前章に述べた H にとっての「実状」を示している点にある。したがって、このバランスの拡張により、多くの言語現象が記述可能になると考えられる。

なお、残された「文脈」の問題は、次章で扱う。

5. 発話理解におけるバランス

バランス理論を発話に適用するため、ふたつのバランスから構成されたモデルを考える(図 2)。

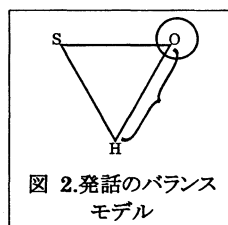


図 2. 発話のバランスモデル

\overline{HO} はバランス理論同様であり、 \overline{HS} は「H が S と良好な会話をしたいか」、また、 \overline{SO} は「S が O のことをどう表現したか」を示す。この時点での \overline{SO} は「S が O

のことをどう思うか」に対する H の認識」ではなく、あくまで表層表現にすぎない。遷移の要・不要の判断後、S の評価に対する H の認識(先述の「実状」となるものとする。

以上 3 評価(\overline{HS} ・ \overline{HO} ・ \overline{SO})は、友好的な会話に必要な要素であり、コミュニケーション・バランスと呼ぶ(以下、CB と略述)。また CB のインバランス状態からバランス状態への遷移を CB 遷移と呼ぶ。

次に、 \widehat{HO} は人の所有や血縁関係等の単位関係を示す⁴⁾。また、 \odot は H の期待「O はどうあるのが理想だと思うか」を示す。一般的に「部屋はきれいな方がよい」等、正の評価であるが、先入観等により負となる場合もある⁵⁾。このとき、表層表現の正負と評価軸が一致しないため、O に対する評価(\overline{HO} ・ \overline{SO} ・ \odot)の符号を同時に反転する必要がある。

以上、 \overline{HO} ・ \odot ・ \widehat{HO} で示された評価は、H が持つ O についての個人的評価であり、パーソナル・バラ

⁴⁾ 神尾(1990)の「なわ張りの内」に相当すると考えられる。なお、本研究では、H と単位関係にない対象については議論しない。

⁵⁾ 「辞書は汚い方がいい」等が該当する。

ンスと呼ぶ(以下、PB と略述)。また、PB インバランスからバランス状態への遷移を PB 遷移と呼ぶ。

なお、CB と PB の差異は、インバランス状態からの遷移の違いにある。CB は他者を介したバランスであり、インバランス状態は望ましくないため遷移を行う。一方、PB は個人的なバランスであるため、自分さえ許せば遷移することなく、インバランスな状態で会話を続行しうる⁹⁾。また、PB 遷移を行った結果、CB がインバランスになった場合、同様の理由により、再び CB 遷移を行う必要がある。

以上述べたように、両バランスは H の対象認識を基礎とした記述である。本研究では、この記述を 3 章で議論した「文脈」と考え、限定することとする⁷⁾。

6. バランスと言語現象

前項により拡張したバランスの考え方を実際の発話理解に適用し、モデルの妥当性を検証する⁸⁾。

例文2.において、H が「部屋はきれいだ」と思っていれば、図 3 に示す状態にある。

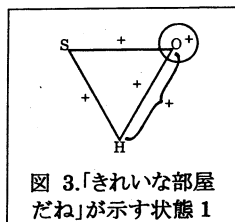


図 3.「きれいな部屋だね」が示す状態 1

なお、このとき H は「S と良好な関係を保つ」、「部屋はきれい」、「部屋はきれいな方がよい」、「部屋は単位関係にある」と思っていることを示す。

この状態はバランス状態にあり、遷移の必要はない。このため H は、S の発話について「表層表現が真、かつ正の評価である」と認識したことになる。また、理想の評価が正、自分の評価が正である O について、S が正の評価を行ったため、「S は称賛した」と間接的な解釈を行ったことになる。この解釈は、例文3、4. に対する説明となる。

次に例文1.(汚いと思う場合)を図 4 に示す。

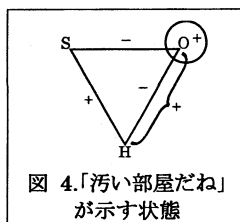


図 4.「汚い部屋だね」が示す状態

このとき、CB はバランス状態にあり、遷移の必要はない。このため、S の発話について「表層表現が真であり、かつ、負の評価である」と認識したことになる。また、理想の評価が正であり、自分の評価が負である O に対して、S が負の評価をしたため、「S は非難した」と間接的な解釈をしたことになる。しかし、PB はインバランスであり遷移可能である(PB 遷移は後述)。

次に、例文2.(汚いと思う場合)を図 5 に示す。

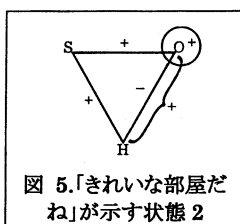


図 5.「きれいな部屋だね」が示す状態 2

この状態からの CB 遷移の中で、 \overline{SO} を負にする方法を述べる⁹⁾。また、遷移後のバランス状態を示す(図 6)。

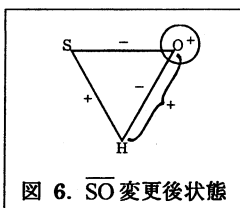


図 6. \overline{SO} 変更後状態

この遷移により、橋元(1986)の「仮人称発話」と瀬戸(1997)の「意味反転」を説明出来る。H は「反語信号」の有無によらず、評価値のみの使用により、対極の意味にあると評価出来るからである。したがって H は「表層表現が偽であり、実際は負の評価である」と認識したことになる。また、理想の評価が正であり、自分の評価が負である O について、S が負の評価をしたため「S は(アイロニーを用いて)非難した」と解釈したことになる。なお、 $\overline{HS} \cdot \overline{HO} \cdot \overline{HO}$ が正、 $\overline{SO} \cdot \odot$ が負の状態も同様に解釈される¹⁰⁾。

⁹⁾ 実際には、H は \overline{HS} を負(コミュニケーションの打ち切り)、 \overline{HO} を正(O に対する認識の変更)、 \overline{SO} を負にする方略を探ることが出来る。

¹⁰⁾ 「否定的な表現によるアイロニーは少ない(cf. 内海, 1997)」が、「...期待が話し手と聞き手双方に明らかな状況下では」アイロニーとなる。本研究は聞き手の認識が対象であり、「H の期待」は負となる。したがって、 $\overline{HS} \cdot \overline{HO} \cdot \overline{HO} \cdot \odot$ が正、 \overline{SO} が負の状態はアイロニーではない。むしろ、認識としては「嘘」「いやがらせ」になると考えられる。

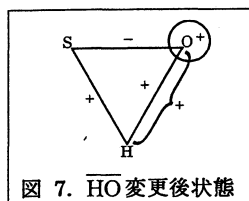
⁶⁾ 会話の継続が可能なことは、1. の発話に続けて、「だよな(同意)」、「忙しくて(弁解)」等の発話が可能なることから明らかである。

⁷⁾ S-O の社会的関係等、重要な要素はあるが、最低限に止める。

⁸⁾ 紙面の都合上、一部の言語現象に説明を限定する。

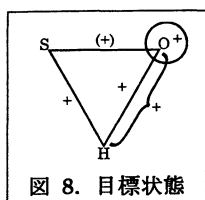
以上のように、CB 遷移によって真偽・正負判断が可能になることを示した。逆に言えば、CB の役割は真偽・正負判断の根拠となると考えられる。

図 4 と図 6 から明らかなように、両者は同一のバランス状態(非難型)を示す。次に、この状態からの PB 遷移方略中、 \overline{HO} を正にする方法について述べる¹¹⁾。この遷移後の状態を図 7 に示す。



遷移の結果、CB バランスが崩れ、再び遷移が必要となるが、 \overline{SO} を正にすると、一度決定した S の評価についての認識と矛盾することにな

る。このため、自分自身の認識を変えるのではなく、S の評価への働きかけが必要となる(図 8)。



したがって、H は目標「 \overline{SO} を正にする」を設定し、実世界での行動を行う。すなわち効果「 \overline{SO} が正」を持つ行動を検索し、その行動を意図する(ex.掃除)。そして、この意

図が間接的解釈として理解されたことになる¹²⁾。バランスだけでは解釈の詳細を決定出来ないが、PB 遷移は行動検索へのトリガーとなると考えられる。このことは非難の結果としての S の想定「何かをするはず(Wierzbicka, 1987)」にも適合する。

以上、聞き手主導のバランスを用いることにより、これまで失敗例として切り捨てられてきた反応も含めて、陳述、称賛、非難、アイロニー、間接的発話行為等の現象が解釈可能であり、モデルの妥当性が検討出来たと考えられる。

¹¹⁾ 実際には、H は○の負への変更(例文6.に示すような合理化)、 \overline{HO} の変更(対象外)、 \overline{HO} の正への変更方略を探ることが出来る。

¹²⁾ Perrault & Allen(1980)のモデルでは、H はプラン推論により発話意図を決定するが、経路選択の困難さが伴う。しかし、バランスに従うと、まず目標が設定され、H は S としてのプラン構築を行うことになる。このため、H はより容易に行為を選択出来るとも考えられる。

7. おわりに

本研究は、聞き手の解釈を単純なモデルで記述することを試みた。紙面の都合上、言語データが少なくなった点は否めないが、聞き手主導のバランス遷移により、聞き手が真偽判断を行い、間接的な解釈を生成する過程の一部を明らかに出来たと考えられる。しかし、検討対象を「O の評価を伴う陳述」に限定し、さらに「文脈」を限定した上で議論を行っているため、結果が生成過程の一部でしかないことは明らかである。複雑な言語現象全てに適用するのは難しいが、「評価を問う疑問文」等、拡張を試みたい。

謝辞

本研究の一部は平成 7 年度広島市立大学特定研究費(A430)の補助を得ている。関係各位に感謝致します。

参考文献

- Ballmer, Th. and Brennenstuhl, W. (1981). *Speech Act Classification: A Study in the Lexical Analysis of English Speech Activity Verbs*. Springer-Verlag.
- 深谷昌弘 田中茂範 (1996). 『コトバのく意味づけ論> - 日常言語の生の営み -』 紀伊国屋書店。
- Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole and J. Morgan(eds.) *Syntax and Semantics. Vol.3: Speech Acts*. Academic Press. (Reprinted in S. Davis(ed.) (1991). *Pragmatics: a reader*. Oxford University Press. 305-315.)
- 橋元良明 (1989). 『背理のコミュニケーション アイロニー・メタファー・インブリケーチャー』 勁草書房。
- Heider, F. (1958). *The Psychology of Interpersonal Relations*. John Wiley & Sons. (大橋正夫(訳) (1978). 『対人関係の心理学』 誠信書房。)
- 神尾昭雄 (1990). 『情報のなわ張り理論 言語の機能的分析』 大修館書店。
- 光永隆昭 (1998). 『依頼に関する発話意図の理解』 広島市立大学 情報科学部 卒業論文。
- Perrault, C. R. and Allen, J. F. (1980). A Plan-Based Analysis of Indirect Speech Acts. *American Journal of Computational linguistics*, 6(3-4), 167-182.
- Searle, J. R. (1958). *Speech acts: An essay in the philosophy of language*. Cambridge University Press. (坂本百大・土屋俊(訳) (1986). 『言語行為』 勁草書房。)
- 瀬戸賢一 (1997). 『認識のレトリック』 海鳴社。
- 内海彰 (1997). 「アイロニーとは何か? - アイロニーの暗黙提示理論」『認知科学』, 4(4), 99-112.
- Wierzbicka, A. (1987). *English Speech Act Verbs: A semantic dictionary*. Academic Press.
- 山梨正明 (1986). 『発話行為』 大修館書店。